

桜蔭俳話会 四月句会(第二七五回) 於桜蔭会館

平成二十一年四月二十六日

- 4点 外濠の恋のボート花月夜 貞勝  
 何やかや逃ぐるもの追ふ磯遊 秀一
- 3点①空白の日記めくるや桜蕊 ヤエ子  
 涅槃西風をちの江の島寝釈迦めく 貞勝
- 3点 彼岸過ぎ俳句いちづの恩師去る 真三  
 宅地化に抗ふ烟桃咲きて 貞勝
- 2点①白れんやコツブの水のカルキ臭 守  
 トンネルを抜ければふはり春の月 幸
- 2点 連れ舞ふは飛天か真夜を散る桜 みどり  
 春眠か惰眠か蹴つて人となる 幸枝  
 悼
- 1点①花蔭の花の傘のかをりけり 秀一  
 異国語も交じり花見の宴かな 与史  
 夏隣渡しに浅く腰掛けぬ 秀一  
 胎内の潮の満ち来し朝様 守
- 1点 春曉に堂の座禅や忍一字 幸  
 思はずに万歩越ゆれば山笑ふ 与史  
 春の暮聖なる牛の糞あちこち ヤエ子  
 ぬま杉や語る人なし春没日 溪水  
 坂途中門を守りて雪柳 真三  
 燕来る古き軒端のある家並 与史  
 聞き分けし鳥の名知らず青岬 秀一  
 空近く続く段畑郭公鳴く ヤエ子
- ※ 通院の途上の花見行き帰り 溪水  
 四月馬鹿許せ紫煙をくゆらすを 貞勝  
 春寒や帽押へつつ渡月橋 幸枝  
 仏壇にかざる沈丁香のほのか 真三  
 行く春や見入る新聞社会面 守  
 ダイケアの車見送る郁子の花 秀一

- 巨船今世界の春へ出航す 溪水  
 晩春のひかり弾けしビル襖 守  
 長押よりも高き盆梅四百年 幸  
 春山家動き素早し裸足の子 ヤエ子  
 花芯までしかとみせたる桜かな 幸枝  
 太閤のゆかりの茶室著莪の花 与史  
 ナマステの声飛び交ふや村の春 ヤエ子  
 (ナマステはネパール語のこんには)
- 二つまた二つの椿小さき庭 真三  
 葉桜や長机一つ寺子屋跡 幸  
 漫然と繰る時刻表鳥雲に 溪水  
 耕しや今日も一人の空仰ぐ 守  
 座禅草春雪まとふ寺の庭 幸枝  
 花袋岸边にたゆたふ日射しかな 溪水  
 雛飾り膳部に盛りつけ一・二粒 幸  
 五分咲きの花見楽しむ若者や 真三  
 ハーブ橋くぐれぬ巨船かすみけり 貞勝  
 天地人  
 淡雪に霞む老杉雲洞庵 幸枝

不在投句・野上貞勝